地震を中心とした災害対策

～コミュニティの自主性と安全・安心～

大阪大学大学院人間科学研究科助教授
㈱日本災害救援ボランティアネットワーク理事
渥　美　公　秀 氏

略歴▶▶▶

1961年大阪生まれ。ミシガン大学大学院心理学専攻博士号取得。1993年神戸大学文学部社会心理学教室助教授を経て97年より大阪大学大学院助教授。専門はグループ・ダイナミックス。「よりよい理論ほど実践的なものはない」をモットーに、地域におけるさまざまな活動について、フィールドワークを重ねている。また、阪神・淡路大震災の体験を機にボランティア活動を始め、特定非営利活動法人「日本災害ボランティアネットワーク」及び「神戸大学学生総合ボランティアセンター」の立ち上げに関わる。

Ⅰ．はじめに

１．話の流れ

今日は話を三つぐらいに分けてお話ししようと思っています。第１のパートは「災害ボランティア活動の経緯と現状」ということで、具体例を中心に中越（新潟県中越地震）のお話をさせていただきます。ＮＰＯやボランティアサイドからの話が多いと思いますが、今や市町村という自治体において、災害時のボランティア、ＮＰＯのことを考えておかないといけない時代が来ています。必ずＮＰＯもボランティアの人も駆けつけてきます。それを拒否したか受け入れたかによって、随分運命が変わってきます。そのデータも見ていただきます。ボランティアと一緒にやったところはうまくいっているケースが多いです。しかし、「わけの分からない人は困る」という期間が何日か続くと、困ったことになっています。うまく連携すれば、きちんと役割分担してできるのが災害ボランティアだと思います。その災害ボランティアや災害ＮＰＯという人は一体何をしているのかという現状をお話しするのが最初です。

その次に、「防災ボランティア活動のアイデア」ということです。もちろん各市町村では防災訓練をされていると思いますが、それにプラスして、ちょっとした工夫で子供たちにも楽しんでもらえるような防災のやり方があるということを、写真を中心にお話しします。

最後に、今回は海外研修の事前研修も兼ねていますので、アメリカの事例も入れながら、今こういうことは日本全国で起こっているし、日本各地に災害ＮＰＯがあり、そのネットワークがあるということをお話ししたいと思います。これは新聞などに出てくる話ですので、常にウォッチされていて、もう知っているとおっしゃる方は最後のほうはご休憩いただいたらいいのかもしれませんが、中越地震は現在進行形ですので、できるだけ新鮮な話題を

出すことができればと思います。

なぜ救援のほうから先に言うかというと、考えてみると自分が災害に遭う確率は結構低いからです。これは我々がどうしても感じてしまうバイアス（偏見）ですが、飛行機に乗る前には怖いという感覚を持つ人は多いですが、車に乗る時にはあまり怖いと思っておられません。しかし、交通事故で亡くなる人の数のほうがよほど多いのです。飛行機が落ちることは滅多にありません。それでもやはり飛行機が落ちた時のほうが激しく報道されますし、全員死亡などと言われてしまうと、そのこと自体がショッキングで目立ちますから、そのほうが怖いように思いますが、実際は車の交通事故のほうがよほど多いのです。

あるいは、中越の地震で亡くなられた方は四十数人です。中越の今年の雪で亡くなられた方（雪害）も四十数人で、一緒ぐらいなのです。この１年で自殺された方は３万人です。人数で比べていいものではありませんが、災害というのはなかなか自分が遭うことはないので、ついついおろそかになってしまうのですが、少し視野を広げると、日本中の、あるいは世界中の誰かは、今日、今でも災害に遭っているかもしれません。今も実際に新潟に行けば災害の影響で苦しんでいる方はいらっしゃるし、神戸に行けばまだ災害の苦しみを持った方もたくさんいるわけです。ですから、自分が災害に遭うことはあまりないけれども、救援に行くということはかなりある話なのです。

自治体によってはそんなことはないとおっしゃるかもしれませんが、中越の小千谷市に地震の翌日に行きましたら、各地の自治体から救援の方々が来られていました。もちろん、その時は近いところの方々が大半でしたが、遠くは奈良県や和歌山県のナンバーの車も見かけました。それぞれの自治体間の協定も進んでいるとお伺いしていますので、救援に行くという場合もあり、もちろん自分のところが被害を受ける場合もあるわけです。

そこで、今日のお話は、前半では災害現場で災害ボランティアが何をやっているのかということ、それから、もし自分のところがボランティアに来てもらうような災害に遭ったときに、どのようなことを災害ボランティアがするのかという、救援モードの時の話をします。中盤あたりは防災の話、最後はいろいろなネットワークがあるというお話をしたいと思います。

今日のテーマは「地震を中心とした災害対策」ですが、ボランティアやＮＰＯに焦点を当ててお話ししたいと思っています。タイトルからは、地震が起こったらどう逃げるかとか、日頃ご覧になっている防災計画をどう運用するか、あるいは、自主防災組織をどのように活気づけるかというお話を期待されていたかもしれません。しかし、それは釈迦に説法で、皆さんのほうが余程ご存じの話が多いでしょう。ですから、今日はそういうところにあまり書いていない、あるいは防災計画にはこの頃は必ずボランティアと書いてありますが、連携するといってもどの人と連携するのか分からないという声をよく聞きますので、私たちがやってきた研究や活動を通じてボランティア、ＮＰＯのサイドからお話ししたいと思っています。

２．ボランティアとＮＰＯ

ボランティアとＮＰＯの違いはもうお分かりでしょうか。ボランティアは個人で、ＮＰＯは組織です。それがまず大きな違いです。ＮＰＯというのは非営利組織ですが、例え話として、子供さんが「うちのお父さんはＮＰＯに勤めているけど、ボーナスが出たから自転車を買ってもらった」と言っていたとしたら、その会話はＯＫです。ＮＰＯに勤めるということ、そしてそこでボーナスが出るということはありえます。あるいは、あるＮＰＯで、年間に動いているお金が２億円ということも十分ありえます。

では、株式会社とどう違うのかというと、お金の流れが一方向だという点です。株式会社（大会社）の場合は、自分が株を買い、会社が儲けたお金が配当金として戻ってきます。会社の人にすれば、業績を上げて株主に配当をしなければなりません。株を買ってくれなかったら、資本が集まりませんから、もちろんお客様は神様ということでやっていますが、お金を出してくれた人にどれだけ返せるかというところが経営の勝負になってきます。

しかし、ＮＰＯの場合は違って、寄付してくださるわけです。私がいる日本災害救援ボランティアネットワークだと、寄付していただいたお金は被災者に流れていき、寄付してくれた人に100万円くれたから120万円にして返しますということは絶対にありません。その100万円が被災者に行くという流れです。当たり前ですが、経費は差し引き、給料もあればボーナスもあります。だから、心清き人たちが何も食べずに被災者のことを思って涙しながら活動しているということは絶対にありません。内はものすごく事務的です。

私は災害救援に出かける時、大学を休んで行ったりしますが、そのときは出張伺を日本災害救援ボランティアネットワークに出しているわけです。経費の一番安いところを通ったかはチェックされるし、ホテルの領収書を持っていって、その分お金をもらって一つの出張が終わりです。つまり、皆さんと一緒なのです。それがＮＰＯであり、まさに組織です。したがって、災害救援の場合、これからお話しするような場づくりをするのがＮＰＯで、そこに実際に来て救援活動をしてくれる人はボランティアです。私も混同して呼んでしまうかもしれませんが、ＮＰＯは組織、ボランティアは個人と思ってください。

私の大学には、ボランティア人間科学講座があり、国際救援（国際協力）もやっています。学生さんたちが、今イラクには入っていませんが、アフガニスタンにはよく行っています。それから、ケニアなどのアフリカ諸国、アジア・インドネシア、南米・ペルーなど、いろいろな国に行って活動するという、ＪＩＣＡやＯＤＡという言葉とくっつけて考えていただいたらいいような国際協力活動、これは大変人気があります。この分野と福祉の分野と私の分野です。

大阪大学に通っても、福祉の資格は何も取れません。ただ、介護保険という制度はいいのかとか、歴史的にどうか、ドイツの介護保険制度はどうなっているのかとか、デンマークがいいというけれども、なぜいいのかというようなこと、政治の仕組みなどを考えていくということをやっています。福祉の技術や資格が得られるわけではないけれども、福祉政策を勉強しているということです。教授の一人に元社会保険庁の長官をお迎えしていて、国際協力のほうはＪＩＣＡから来ていただいており、非常に実践的で、実務的なことも勉強できます。私は、大学の先生と災害ＮＰＯの両方をやっていますから、災害救援ということでさせていただいています。

３．自己紹介

①　神戸大学文学部

私自身は、1961年に池田市に生まれ、小学校低学年から交野市に住んでいます。途中、アメリカに行ったりしましたが、現在も交野に住んでいて、自分の住んでいるところが大変好きです。学校が吹田ですから、もう少し北摂に住んでもよかったのですが、やはり育った町、交野がいいということと、両親も健在ですので、今も大変満足して住んでいます。

ただ、この震災のあった時だけは西宮に住んでいました。1993年秋に留学を終え、神戸大学に職があると言っていただいたので何とか帰ってこられました。当時、私は32歳で、大学院に行った者にとっては標準的かもしれませんが、世間よりは10年遅れているのではないかという就職で、初めてお給料を頂けるようになったものですから、大喜びで通っていました。神戸大学は、ＪＲ六甲道駅の北側の山沿いにあって、窓を開ければ100万ドルの夜景が見られる素晴らしいところにある、素晴らしい大学です。家は交野の星田ですが、まだ東西線がなかったため、時間がかかるので西宮に官舎を借りて住んでおりました。

②　あの日

1995年１月17日、あの日が来てしまいます。初めての教え子が17日に修士論文を出すという日でした。教師出身の方はよく覚えておられるかもしれませんが、最初の年に教えた子はすごく印象に残るとよく聞きます。大学でもそうで、大変印象に残っています。前の日も振替休日でお休みでしたから、普通は家で寝ていたらいいのですが、初めての教え子が出すわけですから、学校に行って手伝ったりしていました。まとまった文章を提出する時、性格にもよるでしょうが、ページ数が合っているかとか、目次や表紙がきちんとできているか、気になりだしたら切りがありません。１月16日、夜の12時を過ぎても終わりそうもなく、これではあんまりだということで、女子学生は下宿へ帰らせて、男子学生は大学の私の部屋に泊めておいて、私は車で西宮の家に帰りました。17日になれば、彼・彼女は論文を提出し、私たちは打ち上げをして楽しい日が来るだろうと思っていました。帰る途中、大変満月がきれいだったことを覚えています。

帰宅して、少し風邪気味だったので早く（２時ごろ）寝ました。その朝、ものすごく揺れたのでびっくりしました。私は大体朝が弱くて、起こされてもなかなか起きられないほうなのですが、こんなに揺らして起こさな

くてもいいではないかと思うぐらいムッとした覚えがあります。寝ていられないぐらいです。震度７の地域でした。

私たちが寝ていた部屋は官舎ですからかなり狭く、一緒に寝ていた子供の上にタンスが倒れかかったりしているのですが、こちらは寝ぼけ眼で、何が起こっているのかさっぱり分からない状態の中で、これは地震だということがスローモーションで分かってきました。もちろん、揺れている間は震度７とかということは思いもよらないし、何が起こったのだろうという感じです。揺れが収まってみると、足の踏み場もないぐらい食器が割れて、冷蔵庫が動いて、電話が切れて、テレビが落ちるという状況でした。でも、「これでは静岡は大変だな」という思いを当時持ったのを覚えています。それだけ自分のところが揺れていても、まさか神戸にという気がしていました。

幸い家族は全員無事でした。集合住宅でしたので、上の階でもドアをたたいて「大丈夫か」と言っている声も聞こえてきましたし、私たちも何とか外に出て見回すと、木造家屋はほとんど全壊していました。宿舎は西宮の仁川にあったのですが、お向かいの方なども出ていました。

そのような状況の中で、これは一体何なんだということがまず分からないけれども、ラジオをつけると六甲道の駅が落ちていると言っていました。しかし、駅が落ちるということがピンと来なくて、イメージできません。でも、今さっき帰らせた女子学生の下宿はその駅の近くだと聞いていましたし、大学自体も、結果的には大丈夫だったのですが、裏山の斜面が崩れ落ちているかもしれないということで、いてもたってもいられないので、ある程度の家の片付けを済ませ、すぐに飛び出しました。

本当は歩いていけばよかったのですが、車で行ったものですから、近所を一周するぐらいの距離で６時間ぐらいかかって、結局車を置きに帰りました。途中で見た風景は、どこかで見たことのあるものが地面に落ちているという感じでした。枕木とか、枕木の近所に置いてある石などで、なぜだろうと思うと上から新幹線が落ちているという状況でした。火事もありました。また、西宮で火事があった時、昼ごろ私たちが車を運転していると、天王寺区と書いた消防自動車が走っていて、大阪からも助けに来てくれているんだと半分は思い、あとの半分は、そんなひどい火事になっているのかと思いました。

家に帰って、今度は自転車で神戸大学へ行こうとしましたが、ガラスが落ちたあとですから、途中すぐパンクしたので捨てて、結局は歩いて神戸大学まで行きました。幸い、帰らせた子も泊まらせていた学生も両方とも命があったことが確認できましたので、そこから線路伝いにまた歩いて帰ってくることになります。神戸大学が無事建っているということが分かっているものですから、住民の方々はどんどん山へ避難してこられます。神戸大学は避難者で一杯になっていました。頭から血を流した人や口の中に壁土が入った人など、いろいろな人が来られているという状況でした。

我々は線路を歩いて帰ったのですが、遠くを見ると線路が続いていなかったりするのです。何だろうと思ったらマンションが倒れて

いたり、遺体が寝かせてあったり、そのようなとんでもない風景の中を歩いて帰りました。戦争を知らない私たちにとっては、道端に遺体があるというのは驚きの風景でした。

とりあえず交野に帰り、家にいて安否確認をしていくわけですが、そのころは命があったらそれで十分ということでしたので、背骨にひびが入ったという子もいたのですが、生きているのならよしということで、次の安否確認に走るという興奮した状態が続きました。

しかし、我に返る瞬間というのはあるもので、１～２日たつと、何かできるのではないかと思いました。道端でおじさんが泣いていたというようなことを見ていますので、こんなすごいことになっているのに私は交野の親の家で、のほほんとしていていいのかという気がしてきたわけです。たまたま家族全員無事でしたし、それで、ボランティアに行ってみようと思ったのが最初です。

③　世界の平和・家庭の不和

ボランティアというのはあまり好きではありませんでした。皆さんの中にもボランティアについて首をかしげておられる方がいらっしゃるのではないでしょうか。自分たちは仕事でこんなに苦労してやっている、したい仕事かどうか分からない、たまたま人事異動でこれをやっているのに、あいつらはボランティアとかといって寄付金をもらってやっている、それは許せないとおっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんし、何かうさんくさいものを感じられる方もいらっしゃるかもしれません。

ボランティアの業界にも、世界の平和・家庭の不和という言葉があります。世界の平和を考えているのはいいけれども、自分の家庭をどうするのかということが、ボランティアではよく言われることです。あるいは、そこまで言わなくても、一生懸命自分の町で奉仕活動をし、入浴サービスなどをしている。でも自分の親が隣町で寝ているのだったらそちらに行ったほうがいいのではないかと言われたときに、それが本当にいいことかどうかは、考えは分かれるでしょう。

環境ボランティアもそうです。オゾン層がどうしたとか、京都議定書がどうなったという議論を一生懸命しているけれども、自分の部屋がものすごく汚れているということではいけないわけです。まず自分のことができてからやりなさいと言われています。

ところが、そんなことを誰もができるか、そこも考えたくなります。私もそう思って言っていなかったのですが、ではこのとき自分の家はどうだったかというと、むちゃくちゃです。家にも入れませんでした。隣の家の水道棟が倒れてきてうちの家が立ち入り禁止になったので、２か月家に帰れなかったのです。だから、「自分の家は」と聞かれるとむちゃくちゃです。でも、今ここで悲しんでいる人がいるのだということも言えるわけです。

だから、ボランティアをやりだしてから初めて実感をもって分かるのは、自分のことと他人さまにすることとを、簡単に比べてはいけないということです。自分の子供、他人の子供、両方やれたらそれはいいではないかと考えて、今の時期はたまたま他人のことばかりやっている、あるいは、今の時期は自分のことを一生懸命しなければならない時期だけ

れども、長い時間で考えれば両方あってもいいだろうというくらいの気持ちでやらないと、ボランティアなど誰もできないという気がします。

④　西宮ボランティアネットワーク

西宮ボランティアネットワークは、西宮ＹＭＣＡ、関西学院大学、ボーイスカウト西宮支部など、西宮市で集まった13団体のボランティアに西宮市も入ったネットワークで、西宮市自身もネットワークの一員になって活動しました。西宮方式と当時いわれたのは、ボランティアと行政が完全に連携するということです。「西宮方式」と Google や Yahoo で調べていただくと、出てくると思います。そんなことは当たり前だとおっしゃるかもしれませんが、当時は珍しいことでした。

具体的にどんなところがよかったかというと、防災計画適用となると、西宮市の例では税務課の方が救援物資担当と書いてあるので、それは仕方がないから行きますよね。救援物資担当といわれると、市の職員は、受け入れたもの、出していくものについて帳簿を作ってきちんと記録を残さなければいけないとおっしゃいます。しかし、西宮市は23万個の物資をゆうパックでもらったのですが、それを全部帳簿につけるだけで中身は腐ってしまいます。２～３人の職員でそんなことをしていられません。その周りにはボランティアが100人いるとなったら、ボランティアがしたらいいではないかという話です。西宮市の場合は、救援物資の係をボランティアに任せ、職員さんは同じように手伝いながら、朝と晩、大体どんなものがあったか、日誌のようなものをつけるだけでいいという感じがしました。

反対に、分担してはいけないところもあります。罹災証明に判を押す人は職員でなければいけません。しかし、並んで待っているところで「ここが最後です」というようなことはボランティアでできますから、そんなところに職員に入ってもらう必要はないわけです。また、市役所庁内の倒れた棚を起こしていくようなことはボランティアでできます。しかし、中の書類を点検するのは職員でないとできません。それから、市役所のトイレ掃除の職員さんもいらっしゃいますが、これはボランティアでもできます。それはボランティアにやってもらう。そのように、ボランティアが市役所の庁内に入って活動できたのが西宮です。

⑤　西宮市がしてくれた三つのこと

そういうことができたのはなぜかということをお話ししておきますと、西宮市がやったことは三つありますが、今言えることは二つです。言えないことは何かというと、ボランティアに傷害保険をかけてくれたことです。今はさすがにボランティアに行く人は、自分で保険に入っていきます。ボランティア保険が結構広がっています。あるいは、これからお話しする災害ボランティアセンターに行きますとその場で入れますから、もはや自治体がボランティア保険に入る必要はないと思います。でも、当時はなかったため、加入してくれたのです。これにはボランティアの間で歓声が上がりました。見ず知らずのところに来て、被災している市が我々に保険までかけてくれるのかと、そう受け取ったわけです。

管理者側からすると、危なっかしい一般市民に働いてもらって、けがをしたらどうしようということだったのかもしれませんが、ボランティアとしては感激したわけです。

そして、何がよかったかというと、認知と周知です。認知というのは、ボランティアが来ていることを、西宮市が正式に認めたということです。市長さんもおっしゃいましたが、西宮市役所の震災当日の出勤率は50%を切りました。さぼったわけではなく、来られないのです。特に東海道線は速いので、遠くから通われている方がたくさんいて来られない、それから家族を亡くされているとかということで、無理だったのです。そのような中で、いざ西宮市が再建しようと思うと、ボランティアの手を借りるしかない。これはトップである市長さんの英断でした。これが認知です。自治体でそれぞれのトップが認知してくれるかどうかというのは大きな話です。

次に、周知というのは、ナンバーツーの位置にある人（市によって部局名は違うかもしれませんが、西宮市の場合は企画局長）の名前で、「西宮市は、西宮ボランティアネットワークと一緒に救援に当たります」と書いた書類が、全職員に回されたということです。そうすると、すべての職員がそのことを知っている前提ですから、どこでも、その場で決定したらいいことはもう決定してくれという話になります。先ほどの救援物資にしても、体育館２～３か所分ありましたから全部をやることは無理なので、ボランティアがやると言っているのだったらボランティアにやってもらおうということです。ボランティアといっても、倉庫の組合などからも来てくれているわけです。プロが来てくださるなら任せようという話がローカルにたくさんできてきます。庁内ではロッカーを元に戻すとか、いろいろな細かな話も含めたことが、その場、その場でできたのはなぜかというと、トップが認め、その次に周知をしたということです。これにはコストは何もかかっていません。この二つが大事だったのです。

⑥　ボランティアがしたこと

ボランティアは何をしたかというと、政治運動をしないということです。市会議員さんがよく訪ねてきますが、どの議員さんにも等しく接するということです。「おれのことを知らないのか」と口汚くおっしゃった議員さんもいたのですが、よそから来たボランティアは、その市の市会議員なんて知らないわけです。市会議員の方々もそれぞれの思いをもって救援されるのですが、特定の議員さんに何かするということはないということです。

それから、宗教の布教もしないということです。もちろん、クリスチャンの方も仏教徒の方も、宗教団体からも来られていますが、布教活動はしないということです。

それから、「非営利活動です。お金は要りません」ということを一生懸命言っていって、決め言葉は「行政も被災者でしょう」ということです。この協力体制でうまくいったわけです。

今来る災害ＮＰＯは、大体みなさんそう言います。うそはありません。そこで儲けようと思っている人もいませんし、変な例ばかりが放送されますが、100万人も行くボランティアの中の１人、２人がそうだったという話

であって、全体が危なっかしいわけではありません。そのような形でネットワークを立ち上げて、それが日本最大級のボランティアネットワークになっていったということです。

４．私が参加した災害ボランティア活動

私は一応学者なので、いろいろな活動のときに、どの災害で何万人来たというようなグラフをお見せすればいいのですが、私たちのスタイルは自分が現地に行って自分も活動するものですので、自分が行ったものだけを書いてあります。阪神・淡路大震災、インドネシアの地震、重油流出事故等です。

重油流出事故が、災害ボランティアを普及させた一番の災害だったと思います。なぜなら、活動が単純だからです。地震などの場合には、心のケアが必要な人もいれば、けがをしている人もいれば、家の借金のことで悩んでいる人がいるというように、さまざまですが、重油災害はとにかく人が行って重油をすくえば何とかなるということで、多くの人が参加しやすかったのです。楽だったわけではなく、かなり辛かったのですが、我々の団体はこの辺から、ボランティアのコーディネートに一生懸命になっていきました。

台湾の大地震が1999年にありましたが、これは我々の団体のある意味での絶頂期だったかもしれません。台湾で地震が起きた当初、日本政府から救援が出るかどうか、国交がないので分からなかったのです。そこで、民間が行かなければいけないというので、ちょうど留守にしていた家族に書き置きを残して、その日のうちに台湾へ向かい、結局１週間行ったままでした。朝の１時の地震でしたが、その日の夕方の４時には台湾へ行きました。

そこまでする必要があったかは、結果的には大いに疑問のあるところではあります。というのは、台湾はものすごくボランティア活動の盛んな地域で、震災の当日に３交代で制服を着てボランティア活動を始めていたのです。２交代目の人に何をしているのか聞いたら、「私は救援している人に夜食を出すのが仕事です」と、もう分担が決まっていて、このような地域なのかと思って、私は台北から、日本からのボランティアは来なくていいという発信をしました。そして、自分たちはもう少し奥地に入って救援活動を個別にしました。日本政府も北京との打ち合わせをしたと思いますが、政府の救援隊を組織して、がれきをどける人や犬などを、たくさん送り込むことができました。

他にもいろいろなところへ行きましたが、最近の、今日話題に出てくるものだけ言っておくと、2003年の宮城北部地震。このときには五つの町村が災害救助法の適用を受けました。そして、そのうちの三つがボランティアセンターを作り、二つが作りませんでした。三つのうちの二つが災害ＮＰＯとべったりくっついて作って、あと一つは個人的にやったというものです。要するにボランティアと連携した自治体と、しなかった自治体とがあったのです。

イラン南東部地震は、今日の話にはあまり出てこないと思います。しかし、これも人口の３分の１が亡くなるというような地震でした。皆さんの町でお考えになってください。それぞれの町の人口のうち３分の１が亡くなるというと、道行く人が皆遺族です。雰囲気

たるや何ともいえない状況でした。今もここの救援を続けています。我々の方へかなりのご寄付を頂きましたので、向こうが必要とするもの、子供の応援をしているので、遊び場や体育館を作るといったことも、物価が違うからできますので、私も時々イランへ行っているという状態です。

地域ができること、市町村ができることが、どんな地震でもあります。例えば、これは教育委員会の方がいらっしゃるところでお話ししたほうがいいことなのですが、兵庫県猪名川町の白金小学校の２年生が、４月から総合学習で「外国って何」というような勉強をしていて、地球儀を見たり、いろいろな風俗を知ったりしていました。そして、12月にこの地震が起こったので先生が機転を利かせて、イランのお友達に絵を描いてみようという話になりました。そして、描いたけれどもどうするかということで、うちの団体に電話があり、「イランに行きますか」と言われて、ちょうど私が行くときだったので持っていきますということで、２年生の子供たちの絵を現地に持っていきました。現地ではすごく喜んでもらえて、また現地の子が描いた絵を持って帰ってきました。そして、それを神戸で展示しましたら、たくさんの人が見に来てくださいました。イランの子供たちの手紙もあって、日本で地震があったら助けに行くからねと分からない字で書いてあるのです。また、その小学校は、中越地震の際には６年生がマフラーを手編みで編んでくれました。

被災地にある小学校として、どうしていったらいいのかということをある先生が真剣に考えていかれた時に、このような交流が生まれ、そのあとＮＰＯなどが絡んで交流しているのです。別にイランで大きな地震が起ころうが、あしたの私の生活に変わりはないのです。しかし、それをきっかけに町興しになっていったり、小学校の活性化になっていったりする可能性があるので、単に地震が起こって救援部隊が行ったというだけの話で終わらせてはいけないと思っています。

そして、これからお話しする新潟県中越地震です。

Ⅱ．㈱日本災害救援ボランティアネットワーク（ＮＶＮＡＤ）

１．組織紹介

私たちの組織は日本災害救援ボランティアネットワークといって、震災の情報を伝えるということを理念としてやっています。名前は大きいですが、年間約2,000万の予算で動いています。そこから推して知るべしで、給料を払えている職員は２人です。社会保障等をつけなければいけませんので、手取りはものすごく安いです。そのほかは、ボランティアで来てくれている人、アルバイトの人などでやっています。

収入は、会員になっていただいた300～400人の皆さんからの会費（１人3,000円）によって支えられているほか、各市町村や各都道府県から委託をいただいています。災害救援コーディネーター講座など、和歌山県では何ヶ所かで高校生と一緒に防災を考えるセミナーを企画せよといわれて、100万単位のお金が委託料で入っているはずです。私たちが行って高校生と一緒に防災について考えるセミナーをやったりするわけです。群馬県、富山

県、長野県、千葉県、大分県、宮崎県などから、講座を例えば５回シリーズでやりませんかと言っていただき、競争入札で他のＮＰＯも出します。交通費を安く見積もっているところや講師の数、謝金が安いところとかいろいろ競争があって、うちが落札するとお金が入ります。それから、こういうことをやりますといって財団から助成金をもらってくるというようなことで動いています。

私たちが今大事にしているのは、やはり行政や企業と連携した防災活動をすることで、これが一つ大事な点だと思っています。それぞれの市町村ときちんと連携するほうが絶対に被災者のためにいい。私たちがいいとか筋が通るという問題ではなく、被災者にとっていいかどうかの問題だということで、西宮方式でやってきました。被災者の方々を恒久的にケアをしていくのはもちろん地方自治体です。しかし、自治体であればこそ公平でなければいけないので、個人に何かするのは自治体として無理というときに、ボランティアさえ知っていれば、ボランティアの人はそこでやり方を決めなくていいわけですから、ボランティアが濃淡をつけて救援をする、行政の方は平らに救援する、これでうまくいくケースが結構あると思ったのです。それで行政と連携します。企業も同じ理屈です。また、社会福祉協議会との連携の大事さについても、後ほどお話ししたいと思っています。

２．ＮＶＮＡＤの活動

具体的には、次のような活動をします。緊急時には国内の場合は災害ボランティアセンターを作るために動いてもらっています。国外の場合は２～３人しかいないような団体が行っても困りますので、神戸の団体でネットワークを組んで「From Kobe」ということでみんなが頑張っていくということで、イランへは神戸のいろいろな団体と一緒に行かせていただきました。

平常時は三つの柱でやっています。一つは災害救援コーディネーター養成講座です。今日は２時間座っていただいていますが、眠くなってしまうので、２コマ目には出てきていただいて、テーブルでワークショップをやったり、地図を広げて逃げ道を考えたり、そんなワークショップを入れながら３～４日間のコースを作ってやっていきます。私は心理学者ですが、心のケアをやるのではなく、グループの方ですので、必要であれば心のケアの専門家を呼んできて話をしてもらう手配をしたりと、いろいろやっています。このコーディネーター養成講座は黒字です。

２番目に、地域における防災活動です。これは子供たちと行う活動で、収支はトントンです。100万円の助成金をもらったら100万円の活動をしているだけで、儲けはありません。

最後に、災害ボランティアのネットワーク化。この週末も名古屋であるのですが、全国各地にけっこう災害ＮＰＯがあり、この人たちがネットワークづくりをしているのですが、これは赤字です。なぜなら、そのネットワークのためには誰もお金を出してくれないからです。今回の名古屋の出張費は自分で出さなければいけません。

そのように、黒字とトントンと赤字で何とかやっている感じです。

Ⅲ．中越地震救援活動から

１．改めて、はじめに

まず、災害が起こります。これは、自分の町が災害に遭ったら、このように人が来てくれてこのようにするのだなと聞いていただいてもいいし、例えば静岡で大きな災害があったら、うちの町からどう派遣するかということを考えていただいても結構です。緊急時の活動ということでお話しします。

阪神・淡路大震災（1995年）の時には、100万人以上のボランティアが来てくれたということで、メディアはこぞってボランティア元年といっておりました。学者ぶったことを言いますと、元年でも何でもなく、関東大震災（1923年）の時もたくさんのボランティアが活躍しています。それから、忘れてはいけないのは、島原で雲仙普賢岳が噴火した時にも、ボランティアはたくさん行っているわけです。ただ、神戸という日本で住みたい場所としていつもランクが上の、みんなが知っている町、あの美しい神戸等々、いろいろ形容できますが、そこに100万もの、しかも若者を中心とした人たちが集まったということでボランティア元年と言われているわけです。ボランティアがなかった国ではありません。でも、その集中の度合いが大きかったのです。

あれから10年経ち、災害救援活動にボランティアが参加することは、もはや当たり前になってきました。当たり前ではないという意見ももちろんあるかもしれません。住民の側にもあります。何のために税金を払っているのかという住民もよくいますし、税金で防災を頼んでいるのだから、なぜ私が防災しなければいけないのか、行政でやってくれというタイプの人もいるかもしれません。でも、大まかに見れば、まずボランティアの人たちを交えて救援活動をすることは、それほど変なことではなく見えると思います。

２．災害ボランティアの10年

災害ボランティアの周辺で起こったことをまとめてみると、1995年は、助ける－助けられることの反転があった時期でした。多くの方がボランティアに行って、助けているつもりが助けられたと思って帰ってきたわけです。人間の温かさを知った、頑張れると思った等々、被災者に教えられた人はたくさんいます。だから、ボランティアは一方的に助ける側ではありません。助けるつもりで行っているのに、教えてもらうことはたくさんあって、それが学生などにとってはすごくいいことだと思っています。

1997年の重油流出事故では、たくさんの人がボランティア活動に行くようになり、活動が大衆化しました。そして1998年、1999年には特定非営利活動促進法ができ、特定非営利活動法人といわれるようになりました。うちの団体は、実は兵庫県での第１号認証です。このような法律ができて、法人にしてくれるのだったら１番を取ろうというので前日から並んだのです。これは裏を返せば、絶対つぶれたら困ると、私たちや私たちを支えてくれている人は思ったのです。第１号のＮＰＯ法人が兵庫県でつぶれてはいけないだろうということで、絶対にここは１番になっておいて、このような組織が大事だということを言っていかなければいけないと思って並んだのです。

そうこうするうちに現場の方も変わってき

て、ボランティアが来て混乱するということはだんだんなくなってきました。1998年には東北で水害があって、私たちも行きました。これも家族に迷惑をかけていますが、大学に行って仕事をしていると、今だったら携帯に連絡が入って、「どこそこで水害発生」と来るのです。私たちはすぐ行っても何の役にも立たないのですが、やはりすぐ行こうということになります。そうしたら、家に今日は帰れないと話をして、そこから夜行バスに乗って東北に行ってしまうわけです。

このときは栃木県まで行って、ボランティアセンターを作ることをやったのですが、この頃からたくさんのボランティアさんが来てくれるのが当たり前になりました。そうすると、受付がしっかりしていないと混乱しますので、そのためにボランティアセンターを作るわけです。ここでは、お決まりのしなければいけないことがあります。保険に入らなければいけないとか、住所や電話番号をきちっと聞いておかなければ、救援に行ったまま帰っていないということもありますから、きちんと家に帰ったのかどうか、全部フォローしているわけです。また、注意事項を皆さんに言わなければいけないということで、ボランティアセンターを必ず作るということがこの辺からできてきました。

災害ＮＰＯのネットワークは、５年経ってやっとできてきました。そして、現在は、内閣府と災害ＮＰＯとの懇談会が連続して開かれており、私もその委員として出席しています。本職の方で出ますから学識者といわれますが、半分ＮＰＯの人間ですから、災害ＮＰＯとしても呼んでいただいて、国の委員会なのでＮＰＯと国とが丁丁発止の論争が繰り広げられています。

国の方としても災害の多発で、台風23号による災害が各地で起きた時には、瞬間的な統計ですが、全国で56か所でしたか、災害ボランティアセンターが設置されました。そうなってくると、政府も黙ってはいられません。兵庫、新潟、福井など、各県で災害ボランティアセンターが立ち上がっていて、どうしようと言っていたら、10月23日には中越地震が起こって、さらに立ち上がって…、ということになりましたので、国としてもどのような対策を打つかということを検討しているわけです。

この辺には私どもが納得できないロジックもあって、こういうときには国から幾ら出すとか、こういう保障をするという法律を決めてくれるのはありがたいけれども、我々としては神戸で起こったことをもう一回見つめ直し、一つ一つが触れ合った温かさを取り戻さなければいけないのではないかと思っているのです。しかし、国の流れとしては、ボランティアを保障する制度を作っていこうとしていますから、ますますボランティアは組み込まれていくと思います。

３．阪神・神戸であったこと

神戸の震災では、来てくれて当たり前の消防車が来てくれない、救急車が足りないなど、まず既存システムが崩壊しました。行政も被災者だというのはそのとおりで、通常の事務ができない中で仕事をされたわけです。

それから、偶有性の感得というのは、自分が死んでいたかもしれない、偶然自分だった

かもしれないと思うということです。これは、普通では感じないことですが、ＪＲ西日本の事故の時、あの線路を毎日通っておられる方の中には、感じた方がいらっしゃるのではないでしょうか。阪神大震災もまさにそうでした。自分の上にたまたま柱が落ちてこなかっただけで、隣の家は落ちてきたからあの人が死んだというのがあちこちであるわけです。自分かもしれないということが思い浮かぶ、これがかなり大きなことです。

４．中越地震救援の特徴

中越のことをなぜこんなに言うかというと、今も進行中だからということもありますが、考えてみると、この10年で初めてのパターンの災害だからです。

支援が複雑で、しかも長期にわたる災害は、これまであまりありませんでした。重油流出事故などはすくうという単純作業ですし、たくさんでやればやるほど短期で済みます。水害も基本的には泥を出して片付けるということが中心になりますから、ある程度単純に早く終わっていきます。本当はそれが終わってからの被災者復興支援が大事なのですが、普通ボランティアが出てくる場面は単純で短期です。

しかし、複雑で長期にわたるというのは、例えば三宅島の噴火がそうです。ようやく島民が三宅島に帰ることができるようになりました。帰るのはいいのですが、家族がついてきてくれない、東京で進学するなど、個別の複雑な問題が絡んでいます。しかも長期、５年以上たってやっと家に帰っているわけですから、５年、10年というスパンです。

中越も全く同様で、山古志村が全村避難をされたことは記憶に新しいと思います。あの山古志村の方々はこれから何年経ったら帰れるのか、そもそも帰れるのかという問題があります。何年かかるか分からない、長期であり、そして支援は複雑です。なぜなら山古志村の方々は、本当は帰りたいのかどうか分からないからです。多くの人は帰りたいというのですが、この際、都会に住もうかという声も聞こえてこないことはありません。

それから、コイを飼っておられますが、どこでコイを仕入れるのか、幾らで取り引きされているのかなど、複雑すぎて分かりませんので、下手に第三者がレポートしても、全然中身に通じた発言にならないのです。このように、複雑で長期にわたるというのは、珍しい災害なのです。

５．救援活動の特徴

私たちは、中越でも災害ボランティアセンターの設立を行いました。災害ＮＰＯは設立から10年経っていましたから、その間のいろいろな知恵を持って、大抵の町では社会福祉協議会に行って、そこに災害ボランティアセンターを作りました。長岡市、小千谷市、川口町を中心にお話しします。災害ＮＰＯの中には、災害ボランティアセンターから独立した活動を展開していたところも幾つかあります。私たちは「ＫＯＢＥから応援する会」というものを作っていきました。私たちの団体はずっと長岡市にいて、長岡市に避難されてきた山古志村の方々などと接しています。

６．災害ＮＰＯとの連携

宮城県では、五つの町が被災しました。そのうちの一つ、南郷町はＮＰＯとの連携が非常にうまくいったところです。裏話として町長さんが海外出張中だったということもあったのですが、発災翌日には災害ＮＰＯが社会福祉協議会と連携するということが公に決まって動き出しました。1,970人のボランティアがやってきて、ボランティア活動者数が2,261人ということは、ここに行けば１人１回以上何か仕事があったのです。つまり、ボランティアがうまく回転していたということです。ところが、矢本町は724人のボランティアさんが駆けつけてくれたのに、266人しか動いていない。500人は何もできなくてボランティアセンターでじっとしていたわけです。ではニーズは少なかったかというと、人が欲しいという依頼は227件来ています。724人もいるのだったら、それをどんどん出したらよかったのですが、うまく回らなかったわけです。

ニーズとはどのようなものかというと、ブロック塀を起こしてくれといわれて行ってみると、大きな家におじいちゃんとおばあちゃんが２人でお住まいで、ブロック塀が倒れて車が入らない。でも、ブロックを一個一個直すなんておじいちゃん・おばあちゃんはできません。そこで、体の強い人が行ってブロック塀を片付けて帰る、それで１件です。

南郷町では、そんな活動が303件あって、2,261人が派遣できました。矢本町、河南町はどちらも人数が余ってしまいました。コーディネートがうまくできなかったわけです。この２町には、ボランティアセンターが常設されていました。センターといってもヘルパーさんなどがいる福祉のボランティアセンターです。だから、発災時にはそれではいけないわけです。交野市にもボランティアセンターがあって、ものすごく活発に活動しておられます。それはそれで平常時はいいのですが、災害時は災害のボランティアセンターを別口で作らないと大変なことになるということです。

鳴瀬町は、災害ＮＰＯの方が入ってしっかり取り組まれたのですが、組織の名前を出すと町が受け入れてくれないので個人の資格で入ってくれと言われて、個人で入っていろいろと指導されたようです。ここも280人（受付数）と489人（活動者数）とうまくいっています。

鹿島台町は私も行って大変困ったところですが、トップの方が「自分のところには日ごろから介護などをやっているボランティアセンターがある」とおっしゃって、頑として譲らないのです。「デイサービスなどを近所のお母さんにやってもらっている既存のボランティアセンターでいける、災害ボランティアセンターなんて要らない」とおっしゃるので、「違う」と言ったのですが、「イメージがわかない」とおっしゃって、１日、２日と過ぎていき、何とか説得してやったものですから、センターを作るのが１週間遅れたのです。ですから、南郷町と鹿島台町と被害の程度は一緒なのですが、けたが違います。動き出してからのことを書いてあるので、受付数が317人で活動者数340人と、１人１回以上活動できていていいのですが、ニーズが32件と規模が小さすぎました。

半年後に、「大阪大学の人間ですがインタ

ビューさせてください」と電話をしたところ、ある町は「どうぞ来てください、うちは視察ラッシュで対応する職員もつけています」とおっしゃいました。行ったら新聞社も来ていて、「みんなでどうやったら連携できるのか、取材も受けています」と言って自分のところのパンフレットなどを出して手慣れたものです。ところが、別のあるところは、「今度からきちんとやりますから、頼みますから取材はやめてください」というような対応でした。同じような被害を受けて、同じように行政組織があって、同じように社会福祉協議会があり、同じＮＰＯが行っているわけです。でも、対応が少し違うだけでこんなに活動に差ができてしまったということです。何も私たちが活動できたらハッピーなわけではなくて、被災者にとってどうかということです。32件の家のブロック塀を起こすことも大事かもしれません。しかし、うまくやれば三百何軒片付いたかもしれないのです。

インタビューに行って、なるほどその通りだと思ったのは、南郷町はうまくやったとみんなから言われて鼻高々で、そうなると町民の方々の意識が上がっていたのです。今まで町内会の連合会のようなものがたくさん町の中にあって、地区別会などをやっていらっしゃったのですが、それに災害のことを入れて、地区の祭りなどに災害のことを入れたりして、自主防災組織を自分たちで活性化するようになったのです。

宮城県は99%地震に襲われると言われています。今いちばん来る確率が高いのは宮城県です。私たちもこれは練習になるといって出動したのですが、この宮城県の中で、それぞれが自分の家を点検して、もう一回地震があった時には二千何人もお世話にならなくて済むようにきちんとやろうと頑張っていらっしゃるわけです。他の町ではそういう話は聞いたことがありません。このように、ボランティアと連携したことによって、後々までよかったというデータだと思います。

７．救援活動の事例

日本災害救援ボランティアネットワーク

中越の話に戻します。私たちは、中越地震の翌日、10月24日に飛行機で現地に入りました。そして、長岡市で災害ボランティアセンターを作り、山古志班を作って、福島県のＮＰＯと連携して活動していくことになりました。そして、１か月後ぐらいからは「ＫＯＢＥから応援する会」を作って中越復興市民会議を行っています。

災害ボランティアセンターは、１ヶ月経てば解散すべきです。ずっと持っている必要はありません。ただ、最初の大変な時、１週間なり、２週間なり、当座は持っておいていただくと、後がスムーズにいきます。長岡の場合も、１か月経てば解散するだろうと思いましたので、私たちは別口の「ＫＯＢＥから応援する会」を作ったわけです。

①　緊急期（地震翌日～）

福祉センターは、どこの町にもあります。10月24日に行って、社会福祉協議会の方と協議してここを使おうということになり、ここにボランティア受付を設けました。これが10月25日の話です。行政にボランティア受付カウンターは全然必要ありません。ボランティ

アが放っておいても作ってくれます。受付のテーブルと後ろで座るイスぐらいは用意してあげてください。そこで何を書いているかというと、受付票を書いているのです。私たちが持参するコンピュータの中には、ボランティア受付票やニーズ調査票などが入っていますので、それをプリントしてもらってコピーすればすぐできます。今後はダウンロードできるようにホームページに上げていくことも計画していますが、このような書類は、ＮＰＯが持ってきてくれる場合が多いです。受付をしている人は行政の人ではなく、ボランティアの人です。ボランティアがボランティアを受け付けるということでいいわけです。

ボランティアの方は、ボランティアと書いた「たすき」のようなものをつけます。名札などはたくさん用意する必要はありません。蛍光色のガムテープなどを私たちは使っていました。ガムテープに名前を書いて切って張ればよいだけですので、マジックを用意していただく程度で大丈夫です。

センターの壁に、「何々町何丁目の方がブロック塀を片付けてほしいと言っています」とか、「周辺の物を片付けてくれ」とか、「家の中の片付けを手伝ってくれ」といった情報を張り出します。職安のようなものです。「私たちは３人で来たのですが、力仕事だったらできます」という人に、「力仕事３人必要」というところに行ってもらうというような、マッチングをするわけです。

受付で書いてもらうのは、住所・氏名・連絡先・携帯番号、それから例えば英会話など自分のできることや、４輪駆動車に乗っているとか、８人乗りに乗っているというような自分の特徴です。医者や看護師と書かれた方には別の動きをしてもらいますが、その時々に必要な専門が出てきますから、専門と、いつまでいられるかを書いてもらいます。また、その人自身に保険が掛けてあるかということを聞いていきます。掛けていなければ、その場で500円払えば掛けられます。そのようなことを準備していくのが我々の仕事です。

なぜボランティアをこんなにきっちりするのかというと、被災者の身になって考えれば、家にボランティアの人たちが「片付けましょうか」とやってきたときに、「あんただれや」と思うでしょう。ですから、ボランティアに行く人には、「この方はボランティアセンターで登録された何々という方です。何か疑いのある場合はボランティアセンター何番へ電話ください」と書いた刷り物を渡します。疑いを持たれた場合には電話がかかってきますから、「本物ですよ」という話をするわけです。

ボランティアさんが帰ってくると、どのような活動をしたか、報告を書きます。１日で終わるはずが２日かかり、自分は帰らなければいけないということであれば、また明日の募集のところに張っておきます。

このような単純なことです。ただ、それを誰がするかが問題なだけなのです。まず、場所を貸してあげていただきたい。それから、ちょっとした机やイス、文房具を貸していただければあとは流れます。

組織でいうと、普通トップは社会福祉協議会の事務局長さんです。なぜなら、この人は災害対策本部にも出入りをしますから、災対本部のようすがよく分かります。そして、現

場のトップは地元のＮＰＯの人にやってもらいます。ですから、皆さんの場合であれば、自分の町にはどんなＮＰＯがあるか考えていただいて、それは災害ＮＰＯでなくとも、まちづくり団体や園芸の会など、何でもいいのですが、日ごろからコミュニケーションがあって行政の職員さんから見て付き合いやすいＮＰＯの方がいらっしゃれば、その方に中に入ってもらえばよいわけです。そうすれば行政の言うことも聞きますし、地元のＮＰＯだといえば、よそから来た我々ＮＰＯは絶対に文句は言いません。地元の人がやっているのだったらそれでいいではないかという姿勢だからです。そして、その次の実質の中間管理職は、社協の若手のやり手です。大体１人ぐらいはいるはずです。その下で私たちは動くわけです。私たちは毎夕のミーティングで、今日の活動はどうだったかという話をするのですが、ここに社協の局長さんが来られます。行政の方々もここに来てお話をされたらいいのではないでしょうか。

これは何がよかったか悪かったか、大まじめに反省しているところで、外部から行っている我々も意見を求められれば言います。しかし、大抵はよそ者が発言してもあまり意味がないので、悩んでいるようだったらやり手の事務局員を呼んできて「あなたはどう思う」という話を横でそっとしたりするのが、私たちのように外から来た災害ＮＰＯの役割です。私たちは決して表には出ないという形で、地元の人中心にやっていただきます。だから、あまりもめ事もなくいくわけです。

ボランティアが派遣された先は、避難所、救援物資の集積場、ボランティアセンターでの炊き出しです。ボランティアの人たちも食べ物がありませんので、炊き出しなどの寄付をいただいてやっていました。

②　１か月後～　ＫＯＢＥから応援する会

私たちは、当初から、デイサービスなどに支障をきたしますから、福祉センター内にある長岡市の災害ボランティアセンターは、１ヶ月もすれば閉めるだろうと考えていました。そうなると、ボランティアの拠点がなくなります。かといって、私たちが長岡と名乗るわけにはいきません。そこで「ＫＯＢＥから応援する会」というものを作り、仮設住宅のすぐ横のビルを借りました。家賃が15万円かかるのですが、ありがたいことに私たちの団体は、震災直後に寄付金をお願いしたところ、支援金を得ることができました。義援金というのは被災者に行きますが、支援金というのは「我々の活動を支援してください」と言って集めますから、我々が頂くことになります。ＦＭ802とかいろいろなところで言っていただいて、300万円ものお金を皆様から頂きました。お１人1,000円ぐらいなのですが、「自分は行けないけれども頑張ってね」という方々のお気持ちが集まって、三百五十何万円になりました。それは大学生たちが現地に行くことに主に使わせていただき、交通費などの一部をカバーしたのですが、現地ではこのような事務所を借り、いろいろ活動することにしました。私たちがまずしたことは、「こういう事務所がありますので、どうぞよろしかったら来てください」と救援物資のタオルを持って、仮設住宅を一軒一軒回ることです。それに応じて、皆さんが余った救援物

資を仮設住宅からもらいに来てくれています。

また、「ＫＯＢＥから応援する会」に芦屋のお金持ちの方が150万円の寄付をしてくださって、ルミナリエにできるだけ多くの人をご招待したいというので、我々現地にいた者は越後交通にバスをチャーターしに行って、１台神戸へ行くのに幾らかかるのか、乗るのは被災者なので何とかまけてくれませんかというような話をして、仮設住宅にチラシを配って回り、新潟から送り出しました。神戸のほうでは、大阪大学の学生たちがずらっと並んで待っていて、そこでルミナリエをみんなで見るということをさせていただきました。60人で１泊していただいて、ちょうど150万円です。

また、事務所にはイスなどの備品が何もなかったのですが、それをご覧になったある企業の社長さんが突然やって来られて、「こんな殺風景なところで活動していてはいけない」と、全部その社長さん個人の寄付で、早速ソファーなどの調度品を買い揃え、電話も一本引いてくださいました。

また、ＵＣＣ（上島珈琲）さんは、神戸が本店ですから、厚かましく電話しましたら、コーヒーを文字どおり無限に寄付してくださいました。毎日、点検試飲で飲んだ分のレギュラーコーヒーをいつまでもくれるということです。仮設から、多い時ですと何十人という方が来られてそのコーヒーを飲みながら、ソファーに腰掛けてお話しされます。嫁の悪口、うちの漬物の作り方に始まり、来年の作付けはどうだとか、いろんな話をお年寄りのみなさんがしている。私や学生は横で話を聞いているだけです。「おいしいコーヒー入りました」と張り紙をして、そういう場所を演出しているわけです。

それから、学生が行っているバレンタイン企画というのがあって、チョコレートを配っています。これもまた、芦屋のアンリ・シャルパンティエという洋菓子屋さんに電話をしたら、おいしいお菓子を500人分送ってくださったのです。学生は一枚一枚手紙を書き、それを添えて配りました。だから、学生も苦労をしているのですが、そのように交流をしていきました。

また、白金小学校というイランの地震のときに絵を書いてくれた小学校の６年生が、マフラーを作ってくれました。でも、掛けてみると短いのです。犬のマフラーぐらいにしかならないのではないかというものだったのですが、中に手紙が入っていました。寒さは防げないけれども、気持ちだということでそれを壁に張ったところ、被災された方が来られて手に取って眺めて涙ぐんだりしておられました。そのような空間を演出することは、私たちボランティアができることではないかと思ってやっていました。

③　５か月後～　中越復興市民会議

もう雪は解けていますが、できるだけ市民の方のやり方にしたがってということで、中越復興市民会議というものが３月22日から動いています。小千谷市や川口町の行政と連携するという大前提のもとで、被災者の声を届けたいということで、住宅の問題、農地の問題、子供の問題、そして復興の問題を扱っている会議です。これが一つのＮＰＯとして立ち上がってきました。

８．今後の応援

①　被災者中心

ＮＰＯは、まずはやはり被災者中心でなければいけないと思っています。道路の敷設、インフラ整備、学校の建設等々、行政にしかできないことは数多くあります。それはやはり行政にしっかりやっていただきたい。ボランティアには学校は建てられないし、道路は造れないし、水道も引けません。その辺は行政の仕事です。しかし、被災者を中心に１人の人にこだわって何かできるかというと、行政には無理が出てくるところがあるでしょうから、そういった点については私たちＮＰＯが被災者中心で見ていきます。

②　外部からの応援であることの自覚

よく山古志村は日本の原風景とか、素晴らしい田舎だといわれます。ついつい私たちも「あの日本の風景を取り戻したい」と言ってしまうのですが、それはある意味では大きな間違いです。なぜなら、今、山古志村の方々にとっては、次の作付けはいつできるのかということのほうがよほど問題だからです。要するに、原風景を戻したいなどとは思っていないのです。まずは自分たちが食べるものが植えられるのかどうか、私の家に幾ら保障が出るのか、そのことのほうがよほど大きな話なのです。だから、外部から行った者が、素晴らしい町だから残しましょうなどとは、まだ言えたものではないのです。

これは行政の方々も私たちもお互いに反省しなければいけないのですが、家の復興のための給付金制度や、年間何万円未満の収入がある場合でどうだと、固い言葉で要件が並んでいます。そういうものが幾つもあり、難しい本みたいになっていて、どれを使ったらいいか見てくださいと言われても、お年寄りの方には分かりません。

その時に、「おばあちゃんの家だったらこれじゃない？」と言ってあげる人が１人いるだけでどれだけありがたいか。おばあちゃんの話をいろいろ聞いて、「それならこの制度で幾ら」という話をしてあげればよいのです。行政としては、制度を作ってやっているではないかと言うのだけれども、見ているほうは分からないというときのつなぎ役を、私たちができるのではないかということです。

③　忘却への抵抗

道路ができて、山もきれいになった、田んぼも80％回復した、だから復興は終わりというような支配的な物語に入ったのでは困ります。困っている人はずっと困っているのです。最後の１人まできちんと対応できるかというのがボランティアの世界です。

Ⅳ．防災に努めるボランティア
～地域防災活動に工夫を！

１．防災ボランティア活動

防災については、よく「自分の身は自分で守る」といわれ、「防災をするのは市民の義務」とみんな言います。本当でしょうか。それから、防災の講演会をいろいろな町でさせていただくと、「いい話を聞きました。家に帰って呼びかけます」と言って帰られる人がいます。でも、家に帰って隣にお住まいの方に「防災しなければいけない」と言っている人はいないと思います。そんなことを急に言

われても、隣の人も困ります。だから、防災というのは、あまりまじめに考えているだけではいけないのではないかというのが私たちの発想です。

まず、「自分の身は自分で守る」。その通りなのですが、例えば障害をお持ちの方はどうですか。この言い方をすることによって、障害をお持ちの方には大変つらい思いをされるかもしれません。新しくお住まいになった方、あるいは外国語を母語とされている方などなど、多くの方と同じような住み方をすることが困難だという段階にある方もいらっしゃるわけです。そういうときに、自分の身は自分で守ったらいいというのは、格好いいけれども難しい。

それから、自分の身は自分で守るが正しいのだったら、阪神大震災の時、6000人も死んでいません。自分の身を自分で守れなかったから亡くなったわけです。だから、へ理屈ですが、「自分たちの身は自分たちで守る」くらいにせめて変えておかないと、個人のことにしてしまってはいけないというのが私たちの一つの考えです。これは言い過ぎかもしれません。最後の最後、生きるか死ぬかといったら自分ではないかとおっしゃるかもしれませんが、気概としては自分の身を自分で守ると言い切っておしまいにしないようにということです。自分の身は自分で守るというけれども無理ですよね、だから自分たちで守りましょうねというぐらいの幅を持ったものでないと無理ではないかと思います。

それから、「防災するのは市民の義務」。それはそうかもしれませんが、だからといって押しつけているだけの行政も能がありません。義務だから何でもやれというような簡単な説得はありません。義務だけどできないという人がたくさんいる、その人たちにどうしていくかということのほうがよほど大事ではないかと思っています。

ただ、実際には自分たちの身は自分たちで守っているのです。阪神・淡路大震災で埋まった人のうち、６～７割の人が近所の人に助けられています。消防隊や自衛隊が助けた人は２～３割にすぎません。ということは、やはり近所の人同士が助け合っているわけで、これは捨てたものではありません。ＪＲ尼崎駅の事故でも、やはり周囲の人が出ていって助けてくださいました。そのこと自体の善し悪しは別として、現状としてとにかく近所の人が飛び出して助けるということがまだできる国なので、むしろ施策としてはそういうことがもっと起こるようにやるほうがよく、自分の身は自分で守るべきだというだけでは頼りないのではないでしょうか。

そう言いつつも、「防災は大事ですか」と聞くと、恐らくここにいる皆さんは「大事です」と100％おっしゃると思うのですが、「ではご自身のお家を防災されていますか」と聞くと、言葉に詰まる人もいるのではないでしょうか。非常持ち出し袋はありますか。お風呂に水をためて寝ているでしょうか。ペットボトルの水を買っているでしょうか。備蓄を考えた量の缶詰が置いてあるでしょうか。あるいは、家族との間でもし地震が起こったらどこに集まるかということを打ち合わせておられますか。遠くに家族がいるという場合もあるでしょう。阪神・淡路大震災は午前５時46分に起こりましたから大体皆一緒にいま

したが、昼間に震災が起こりますと皆バラバラですから、どこで落ち合うかというようなことを日ごろから打ち合わせておく必要があるわけです。

普通であれば、こんなことをやってくださいねと言うのが研修かもしれませんが、そんなことはできないのが普通ではないかと私は思います。では、それも踏まえた上で何かうまく防災をしてもらえる方法がないだろうかと考えたのが、次にお話しするワークショップなのですが、その背後には私の小学校の避難所での体験があります。

２．避難所でのボランティア活動

私は西宮市立安井小学校でボランティアをやったのですが、お風呂を焚くという活動を１月22日ぐらいから約１ヶ月、泊まり込んだりしながら続けました。グラウンドにブロックを置いて、その上にドラム缶を置いて水を入れて、下でまきを燃やす。そのお湯をユニットバスまでバケツリレーで持っていって水でうめて適温にして入ってもらう。そこでたき火をして暖を取ってもらうということの繰り返しです。

市役所に近い都会の真ん中のどこに木があったのか。私たちの仕事は、チェーンソーを渡されて壊れた家に行って柱を切ってくることです。もちろん許可はもらいます。うちの家を切っていいよというおじさんがいれば、何丁目ですかと聞いて、そこに行って木を切り、それをリヤカーに積んで帰ってきて燃やす。この繰り返しです。私はチェーンソーなど使うのも初めてで、下手くそでしたが、木を切っていると下から三輪車が出てきたり、目も当てられない風景はいっぱいありました。でも、燃やさないとお風呂に入れませんから、１ヶ月それをやりました。

この避難所には1,200人の避難者がいて大変でしたが、問題事も起こらずうまくいったのは、地元の体育振興会が頑張ってくれたからです。自主防災組織ではなく、老人会でも婦人会でも何でもなく、体育振興会です。ここはすこぶる体育振興が盛んなところで、運動会や盆踊りなどを体育振興会主催でやってこられたのです。体育振興会の人は、野球やソフトボールが好きとか、子供が好きということでやっていらして防災組織ではありませんが、日頃からやってきて地域のことをよく知っているので、避難所となったときに見事に対応できたのです。

このことから学んだのは、平常時から防災、防災と言って消火器を持って訓練している人だけが防災をやっているわけではなく、地域でいろいろなことに頑張っている人たちみんなを防災の範疇に入れて考えなければいけないということです。

３．地域における防災活動～わが街再発見ワークショップ

わが街再発見ワークショップのキーワードは、「防災と言わない防災」です。我々のこの活動に目をつけてくださって、損保協会ではビデオを作ってくださいました。また、朝日新聞と一緒になって、全国マップコンクールを開いています。町に通達が行っていますでしょうか。朝日新聞には告知が出ましたが、それぞれの小学校単位でワークショップをし、アウトプットはわが街の地図なのです。この

地図の全国コンクールを去年行い、１月17日震災の日に文部科学大臣賞や朝日新聞社長賞を差し上げました。小学校のために頑張っていただきたいと思ってやっているのですが、私たちはそのアイデアだけを出しました。お金を出してくださったのが損害保険協会と朝日新聞です。

1997年に、須磨で少年が首を切るという不幸な事件があって、そこの子供たちがおびえて外で遊ばなくて困るという話がありました。その気持ちはよく分かるということで、町の安心や安全を高めるための活動をいろいろされていて、我々もそこに呼んでいただきました。私たちは、1999年から阪神・淡路ルネッサンスファンドという助成金を50万円ほど頂いて、日曜日の朝に活動しています。土曜日までの間に我々ＮＰＯや大学の人間、須磨区役所、須磨の消防署、警察、ＰＴＡ、子供会などに集まっていただいて、どこに消火栓があるのか、どこに防火水槽があるのか、どこが危ないのか、防災の勉強をしておきます。そして、日曜日の朝になると子供たちがやってきます。おじさんがボランティアで１人入って、「みんないつもどこで遊んでるの？」と聞くと、子供たちは「何々公園で遊んでる」と答えてくれます。そこで、わが街再発見ですから、「今日、おじさんと一緒に探検隊になってくれないか」と話をするわけです。私たちＮＰＯで、大発見シールとか、突撃インタビューシートとか、デジカメとかいろいろなものを用意し、これをだんだん与えていって、子供たちが街の探検隊になります。おじさんは何も知らないことになっていますから、おじさんを連れて回って一緒に探検しようかというふうになっていくわけです。このように探検隊に仕立てていきます。

子供たちがいつも遊んでいる公園に連れてきてくれればしめしめで、普通なら見過ごす防火水槽を彼らは今日は発見します。「大発見！」とか言うと「何、何」と寄ってきて、「ちゃんとメモを取っておきや」と言います。大発見シートにスケッチを描かなければいけないわけです。子供たちはそれを描いて熱心に勉強しています。私たちが「防火水槽って何や？」と聞くと「知らん」と言います。そう言ったときに、後ろに消防のおじさんが通りかかります。このおじさんに聞いてみようかということになります。おじさんは当然よく知っていて、「よく知っているなあ」という話になって、防火水槽だということが分かってきます。

このときに、この消防隊員の方に固い話をされたら困るのです。「皆さんがお立ちになっている足元に何万トンの水量を誇るものが埋蔵されております」では、子供は「はあ？」という感じです。だから、このおじさんにもいろいろ言っておいて、「今みんなが立っている下はプールみたいになってるんやで」と言うわけです。「うそ、だれが泳ぐん？」とみんな聞いてきます。そこで、「泳ぐんちゃうがな。もしこの辺で火事があったらどうする？ここの水を使うんや」と、子供はそのようなノリで勉強していきますから、それを消防の方にも教えていただきます。

消火栓を発見したら開けてみたりもしますし、子供110番などのステッカーも発見できます。これも傑作です。「子供110番って何や？」と聞いたら、低学年の子が真顔で答え

てくれましたが、「あのな、私、子供やろ、だから110番をかけたら忙しいからお巡りさんが来てくれへん。ここのおばちゃんが来てくれる」、だから子供110番だというのです。「うちのお父ちゃんが110番したらちゃんと警察が来てくれる」という解釈をしているわけです。これは大きな間違いです。だから、きちんと連れて行って、そのときに突撃インタビューです。ピンポーンと押したら、おばちゃんにはきちんと言ってありますから、子供110番のおばちゃんが出てきて、それは違うと教えてくれます。

地域でしたら、消防団にも出てもらってはっぴを着て待っていてもらいます。その場を通るように誘導していきますから、「あれ、こんな人たちがおるの？」というのも発見です。そのようなことをしながら、街の様子を発見していくわけです。

そして昼ご飯を食べて、この写真を使って地図を作っていきます。地図づくりでできたものを言いますと、向かって左の地図はタイトルは「さざえぼん」となっています。これは小さなマスコット人形の名前です。この中の１人がその人形を持って来たので、ボランティアさんのアイデアで、必ずさざえぼんと一緒に写真を撮ったのです。だから、この地図はさざえぼんの大冒険になっています。誰が見ても消火栓のところにばかり行っているので防災マップなのですが、さざえぼんの大冒険ということで、防災ということはそんなに言っていないけれども、防災のことが分かる地図になっています。

また、別のグループでは、子供が得意げな顔をしています。これは分かったのですね、「災害防止マップ」と書いてあります。この子らは小学６年生だと思いますが、子供だましにはあわないよという感じで、これは災害地図だ、災害防止は任せておけみたいな話をきちんとしてくれます。

このように発表したあと、子供会の人が「みんなよく頑張ったね、災害というのはね」という話を少ししたり、消防の方に消防車に乗せてもらったりして１日楽しみます。我々ＮＰＯは関西電力にご協力をお願いして、わが家の防災手帳を作ってもらったので、たくさんもらってきて、「お母さんに渡してね」と言って子供たちに配りました。そうすると、家に帰っても話をしてくれるかなという感じです。

子供たちに向かって、自分の身は自分で守らなければいけないと言って、防火水槽はこういう仕組みになっているということを黒板で教えていたのでは、なかなかこうはいきません。ただ防災のことを教えるのではなく、子供たち自身が楽しんで防災のことを身につけていく、これを防災と言わない防災と呼んでいます。

これは防災ばかりではなく、環境が大変な街だったら環境と言わない環境をやってみたらどうでしょうか。川の縁に落ちている空き缶拾いを、空き缶清掃奉仕などという言い方をするのではなくて、空き缶探検隊とか何かにして、どんな缶が落ちているか、珍しい缶を集めてきた人に何とか賞とか、いちばん大きな缶を持ってきた人に何とか賞をあげるようなコンテストをやってみればよいのです。そして、みんなが集めてきた缶で同じものがいっぱいになったとします。そこで、なぜこ

んなにたくさん缶が落ちているのだろうということを話せば、環境のことを勉強してくれると思います。ほかにも、人権と言わない人権、平和と言わない平和などなど、分かっているけれどもなかなかできない時にこういう手が使えますよということです。

これは行政がやるには少し難しいかもしれません。なぜなら、消防の人もおっしゃっていたように、防災教育にはちゃんとマニュアルがあって、これをやるのが消防署による防災教育であり、救急救命講習であり、それ以外のことをやっている余裕はないというのです。我々がこれをやるときも大変でした。防災課に行ってくれと言われて行ったら、子供が出てくるのだったら教育委員会に行ってくれと言われ、次は土日で地域でやるのだったら地域振興課に行ってくれと言われて、一体どこと一緒にやったらいいのか、なかなか分からなかったのです。そこで、こちらで場所と時間を決めて、行政の関係しそうな部署の方が来てください、そのほうが出てこられるべき方が出てこられるでしょうという形でやりました。

このように、防災ということに限定してしまうとなかなかやる気が起こらない活動も、楽しくやっていくことでうまく進められるのではないか、一つの工夫だという話です。

Ｖ．全国ネットワークの構築

災害ＮＰＯということで自分のところの宣伝ばかりしていましたが、他の日本各地域や世界はどうなっているのでしょうか。市町村職員海外研修にご参加いただく皆様は、ここが一つのイントロになります。全米災害救援ボランティアネットワークのボランティア機構とＪ－Ｎｅｔ、智恵のひろばの三つについてお話しします。

１．アメリカの災害救援事情

アメリカというのは、遠い国だし、関係ないと思われるかもしれませんが、日本が学ぶことはたくさんあります。私は1993年に博士号を取ってアメリカから帰ってきたのですが、その時はもうアメリカから学ぶことはないという気持ちが随分ありました。日本で、自分の国で自分のやりたい研究をしたいという気がしていました。ところが、1995年に震災に遭って、初めてのことばかりだったので学ばなければいけないということで、ちょっと調べてみると、アメリカは結構やっているということが分かりました。

そこで思ったのは、学ぶべきものはまだまだあるということです。アメリカで学んでおしまいではない。昨今のアメリカの動きを見ていると必ずしも賛成することばかりではありませんが、災害救援に関しては大いに賛成するところがあります。９・11のテロのあと、災害救援の部門を政府側はテロ対策ということと一括してしまい、見えない敵を追いかけろというムードになっています。あれだけの攻撃を受けたということで分からないではありませんが、このようなことを発表する会議に行ってもテロのことばかりやっています。

そこで、アメリカの災害救援事情を少しお話しし、ＮＶＯＡＤ（全米災害救援ボランティア機構）の概要や我々との関係をお話ししていきます。

まず、アメリカは、ボランティアによって

成立した国とまで言われることがあります。そこで生まれ育って先祖代々1000年以上住んでいるというような人はあまりいないわけで、ネイティブ・アメリカン以外、ほぼ全員が移民です。その人たちがまずボランタリーに入っていって、ボランティアによって成立している国なのです。

それから、ＮＰＯの支援体制が成立しています。政府との連携は緊密です。注意していただきたいのは、政府のイメージが随分違うということです。例えば東京大学の法学部に行って霞ヶ関の官僚になる、これはいいことなのだ、偉いやつだと思っている人がけっこういると思いますが、アメリカではそのようには決して思っていません。ワシントンの政府で働いている人がすごく偉いとは思っていないわけです。

誰がいちばん偉いかというと、市町村の職員です。地元で接しているからこの人たちがいちばん偉いのではないか、遠いワシントンの話はいいというのが向こうのムードなので、そこをまず分かってもらわなければだめです。市町村の権力や裁量範囲がどれぐらいあるかというのはそれこそ研修していただいたほうがいいと思いますが、社会のムード、市民のムードとしては、国から誰か来るといってもそんな人の話を聞くより地域の市町村の職員に話を聞くというのが第一です。つまり、ボトムアップなのです。ワシントンでインタビューしても、カリフォルニアだったらロサンゼルス市がこう言っているから自分たちもそうするというように、まず市が言っていることが第一です。日本だと霞ヶ関が言っていることが下りてきますが、そうではありません。特に緊急時は市が言っていることが最初です。

それから、政府に行く人が偉いというイメージはほとんどないということ、また市町村の職員にも、去年までＮＰＯで働いていたから、ここ２～３年はずっとロサンゼルスの市役所で働こうと思っている、どこか給料がいいところがあったら企業に行こうかと思っているという人がいっぱいいます。ずっと市役所に勤めるというムードが全くありません。このようなことも大事です。

ですから、比べても意味がない面もあります。そのかわり、災害であれば防災課に勤めます。防災課に自分の仕事があり、防災課に５年いますというような人がいるのです。日本のようにジェネラリストを育てるという方式ではありません。ですから、自分は大学で災害のことを研究してきたから防災をやりたいとなると、カリフォルニア州では年収1,500万だけれど、ロサンゼルス市だったら地震が起こったので2,000万、それならロサンゼルスに行こうかということになります。そして、そのキャリアを使って企業でもっと儲けようかという感じです。だから、行政自体がものすごく流動的なのです。そのような中での連携だと思っています。

一方で、ボランティア活動への参加者が減っています。ソーシャルキャピタルという話を聞かれたことがあると思います。社会的資本などと言われていますが、アメリカの中では、日ごろ一般市民がやっている人気のあるスポーツの一つにボウリングがあります。今まで、ボウリングリーグを作ってチームを作っていくのが多かったのです。でも、この頃ボウリング場に行くとみんな１人でやってい

ます。地域でまとまって何かするということがものすごく減ってきていることに加えて、宗教への思いも減ってきていることもあって、ボランティア活動に参加する人も減ったと言われています。

国や文化の成り立ちの違うところではありますが、災害救援といえばボランティアが活動するのが当然です。その中で出てくる団体としては、まず赤十字があります。日本の赤十字は病院を持っていて血液の管理をしたりいろいろしますが、アメリカの赤十字は病院を持っていません。災害が起これば必ず駆けつけるのが赤十字です。災害といっても大きなものだけではなく、どこかの町で火事があったらすぐ行き、焼け出された人にサンドイッチを配ったりします。また、救世軍（Salvation Army）はキリスト教会ですが、ここも徹底的に災害救援に予算を使っています。大きなトラックなどを持って行って、水を瞬時にたくさん用意して配るのが得意です。ＦＥＭＡ（連邦危機管理庁）は政府の役所ですが、ここだけは縦割りではなく横向きです。この役所が稼働するときは、どの省庁から誰を引っ張ってきて繋いでもいいのです。横向きに全部連携するという組織です。

このような多くのボランティア団体が活動していますので、当然活動の重複もあります。これは日本にも見られることです。地震が起きたときに「毛布が必要だ」などと下手にラジオなどで言ってしまうと、みんな毛布を持って現地に駆けつけて、余ってしまうということが起こります。そんなことがアメリカでも起こっています。そこで、それを調整しようとしたのがＮＶＯＡＤ（全米災害救援ボランティア機構）です。

２．ＮＶＯＡＤの概要（現状・使命・活動・課題）

ＮＶＯＡＤでは読めないので、ＶとＯを逆転させてノーバッドと読んだり、ナショナルボアドと読んだりしています。これはネットワークであって、このネットワークとして救援に当たるわけではありません。アメリカで災害が起こった時に、ＮＶＯＡＤという帽子をかぶっている人は一人もいません。赤十字とかバプティスト協会、アマチュア無線連盟等々、いろいろな団体の帽子をかぶっています。しかし、その人たちはみんなＮＶＯＡＤのメンバーであるという形になっています。

全米で33の全国的な組織があり、州単位でも組織があります。大阪に例をとって言うと、まず全日本災害救援ボランティア機構というのがあったとします。そうすると、そこには我々の団体がきっと入っているでしょう。そして今度は大阪府災害救援ボランティア機構、その次に例えば北河内災害救援ボランティア機構を作り、そして交野市災害救援ボランティア機構を作るという感じです。そして、その一つ一つは何かというと、災害ＮＰＯの代表と行政です。行政が入っていないところもありますが、災害ＮＰＯの代表が集まっています。

いろいろな団体があります。例えばバプティスト協会、それから赤十字、セカンド・ハーベスト。セカンド・ハーベストというのはなかなか面白い団体で、日本にもあったらと思ったのですが、この周辺にはたくさんのレストランがあって、昼の定食などをやってい

ます。でも、日替わり定食をやっていると、明日は同じものを出せないわけです。ということは、お昼の定食だとすれば、夕方にはもうその材料が余っているかもしれません。明日は同じものを出しにくいという店、あるいは明日休みのスーパーで賞味期限が明日切れるというところは今日売れなかったらもう売れないわけです。あちこちにあるそのようなものを全部集めてしまう団体です。集めてきて大きな倉庫に全部入れて、そこでボランティアが分けます。そして、今度は栄養士のボランティアがいて、これで１食作るには、ここと、ここと、ここをセットにして袋に入れたらいいと言うのです。そして袋詰めし、外ではホームレスを支援している団体がずらっと並んでいて、その人たちに、うちは今日、ホームレスが５人いると言われれば５人分、20人と言われれば20人分と渡していきます。私はそこでボランティアしたのですが、なかなか面白かったです。無駄にしないで使っていこうとする精神もいいし、誰も損をしません。昼の定食を企画した社員は余らせたことを怒られるかもしれませんが、セカンド・ハーベストは全米でそのような活動しています。また、ＮＯＶＡ（National Organization for Victim Assistance）というのは、今、日本でもいわれていますが、災害や犯罪に遭われた被災者の方々を支えるネットワークです。アマチュア無線連盟もありますし、その他いろいろあります。

ＮＶＯＡＤは災害救援ボランティア機構の連合体であり、連合体として救援するわけではありませんが、協働、共有、調整、協力といった、みんなでやろうという能力を醸し出しながら全米でネットワークを作っています。

活動としては、年次大会をやったり、教育・訓練をやったり、普及活動、出版、そして大事なのは恐らく市町村の皆さん方、行政との連携をきちんとやっているということです。例えば、枚方市なら枚方市で防災計画を立てられる、これは法的に決まったことですのでＯＫなのですが、やはり市民のための防災マニュアルを市役所が作られたら、災害ＮＰＯと一緒に検討していただいて、その表紙には左に枚方市のマーク、右に災害ＮＰＯのマークが入っていると市民に近づいている感じがすると思います。そのようなことをやっているのです。国レベルの救援物資マニュアルなどを作るのですが、表紙にはＦＥＭＡという連邦政府のマークとこのボランティア団体のマークが入っているわけです。このように共同で出版物を出していくということをやっています。

当面は、ノースリッジ（ロサンゼルス）の地震を経験して、どうもこれではうまくいかない面もあったので、地域ごとにきちんと救援しなければいけないということになりました。ロサンゼルスは移民の多いところで、サンドイッチばかり配っていても、メキシコ系の方々は豆を食べたりしますので、メキシコ料理を配ってくれというように、地域に密着しているかというと、先ほどのように大きな話だと小回りが利かなかった。そこで、ロサンゼルスは独特のシステムを編み出していったということです。今年の海外研修はロサンゼルスに行かれるということなので、その方にはまた詳しくお話し申し上げます。

我々の団体はこの年次大会に毎年行ってお

り、今年は６月17日からデンバーに行って研修をすることになっています。

３．Ｊ－Ｎｅｔへ

最後に、このようなことを学んできた我々は日本でどうしているかということをお話しして、終わりにしたいと思います。

日本ではＪ－Ｎｅｔというものを作っていますが、日本の中には災害ＮＰＯのネットワークが二つあります。一つは「震災がつなぐ全国ネットワーク」（震つな）、それからＪ－Ｎｅｔ（全国災害救援ボランティアネットワーク）です。これらはセリーグとパリーグが交流試合をやっているのと同じで、私たちもそれぞれでやっています。できた経緯が違っただけで、大会もやっています。

アメリカのものを勉強した結果、ネットワークを作るとしたらどうしたらいいかとか、行政や企業とどう連携するのか、地域とどう連携していくのか、年次大会の開き方をどうするのか、平常時はどうするのか、事務局の在り方をどうするかというようなことをＪ－Ｎｅｔに持ち帰って話をしていきました。

Ｊ－Ｎｅｔに加入している災害ＮＰＯは、47都道府県全部にあるわけではありません。勘違いしないでいただきたいのですが、北海道の有珠山が噴火した時に、青森方面隊が出動したのですかと聞いてくる人がいます。しかし、それは自衛隊の話であって、我々はそんなことはありません。ハートネットふくしま、宮城災害救援ボランティアセンター、上越災害救援、東京災害ボランティアネットワーク、天理教などいろいろありますが、有珠山が噴火したとき、この中でそこに行ったのは島原です。なぜ島原の人が行くのかというと、噴火の時のつらさはよく分かるからです。それがＮＰＯのつながりなのです。自衛隊だとそんな遠いところまで行ったらもったいないわけで、青森方面隊に出動してもらった方がいいのですが、ＮＰＯですから、気持ちのこもったところが出ていくということから始めて、我々の神戸の事務局へ、それぞれがここが行ったという連絡をくだされば全体の調整は徐々にしていきます。このようなネットワークを今作っています。

調子よくやってきて、普通ならここで終われたのですが、最近、東海地震、東南海地震などの話がされてきて、たった25ぐらいのＮＰＯが全国にあってもだめだろうということになっています。三つが同時に起こる可能性もあるといわれており、富士山も噴火するかもしれません。「東海地震だ」といって来るわけではありませんから、揺れ方で分かってもらわなければいけませんが、酔うぐらい大きく揺れるということです。これが来たときにはビルの上に２時間でも３時間でも上っていてください。津波が大阪に来ます。枚方も被害想定が出ています。淀川が逆流すると言われているからです。

４．智恵のひろば

そのようなことが言われる中で、ＮＰＯが頑張っていますではだめだろうということで、「智恵のひろば」というものを作りました。局所大規模災害から大規模同時多発災害、例えば神戸だけ、中越だけの大規模な災害だったのが、今後、同時多発の大災害になってきます。そうすると、全国規模のネットワーク

が二つありますが、震災以後10年間の智恵が偏在していて、災害ＮＰＯだけがやっているだけでは困るということで、災害ＮＰＯ有志が集まって作ったものです。

遊び心も添えてやっているのですが、智恵ツリーというデータベースを作っています。また、知恵袋といって先ほどのボランティア受付票、災害ボランティアマニュアルなどが入った災害時の救急箱みたいなものを社会福祉協議会に配ろうと思っています。また、智恵ブリディ（智恵・エブリディ）といって、毎日みんなの智恵を１人200字ずつ、数珠つなぎにしていっています。

５．「気になる言葉」集

今日は、どれもポイントといえばポイントだし、聞き流せばそれまでというお話だったと思います。最後に気になる言葉をご紹介します。

「○○と言わない○○」は言いました。「防災とは言わない防災」、ここに「人権」とか「環境」などを入れてくださいということでした。

次の「マクドナルドのイス」というのは、これから施策をされる時にマクドナルドのイスみたいなやり方もあるということです。マクドナルドのイスは、けっこう硬いのです。なぜなら、早く帰ってほしいからです。もし、入り口に「このマクドナルド店は20分に限ります」と書いてあったら誰も来ません。でも、イスが硬いことによって長居はしない、こういうところをうまく使うということです。

「土手の花見」というのもそういうことです。川の土手に桜がいっぱい植えてあります。なぜかというと、雪解けのときに土手が緩みますから、土手を固めなければいけないので村人を動員してやれと言ってもやりません。でも、桜を植えておいたら勝手に花見をしてくれる、そうすれば固まるわけです。だから桜を植えます。

「稲むらの火」もそうです。庄屋さんがすごく心温かい方で、遠くから津波が来るのを知って村人たちを丘の上に引き上げるためにわらに火をつけて灯したと言われています。これはそうかもしれませんが、実は庄屋の家が燃えていると言ったらみんなやじ馬で上がりますから、それでみんな丘の上に登ったのではないかという話もあります。

そのように、こうしたいああしたいということをモロに出すのではなく、そうしたくなるような仕組みを作っておかなければいけないというので、防災と言わない防災もその仕組みの一つだということです。

「被災地より」というのは、「炊き出しをするというのは、よほどおなかが減っている人がいるのですね」というようなことを言われてびっくりすることがありますが、それは違います。ボランティア団体が炊き出しをしているのは、コミュニケーションの手段としてなのです。とん汁を出して「みそ、ちょっとからい？」と聞いたら、おばあちゃんが「そんなことない」と言い、また「おばあちゃんいつもどんなみそで食べてるの？」という話をするためにとん汁を配っているのです。足湯マッサージなどもまさにそうです。毎日しなければ生きて行けない人はいません。でも、足湯マッサージをすることで、１対１でお話を聞くことができます。足が気持ちよく

なってくると「気持ちええわ、毎日来てくれてありがとう」という話になって、「思い返せば壊れた家にアルバムがあって」という話になったら、おばあちゃんはきっとアルバムを取ってきてほしいわけです。それを聞き出すきっかけになっています。だから、何かをするときにあまり単純に考えないようにしなければなりません。「散髪は髪？」というのも同じことです。そういうことを被災地で一生懸命やっているということが何とか伝わらないかなと思っていました。

コミュニケーションというのも、単に大きい声で言えばいいとか、聞いてくれればいいということよりも、今何の話をしているのかが通じなければいけないということです。例えば、お母さんが子供をしかるときに「もうあんたの好きなようにしなさい」という場合がありますが、子供が「分かりました、好きにします」と言ったらお母さんはもっと怒ると思います。言っていることは「好きにしなさい」ですが、伝えたいことは「好きにするな」ということです。だから、広報に書いてあるから見ているはずだというようなことではいけません。そこから何が伝わっているのか、何が伝わっていないのかをじっくり検討していかないとだめではないかと思います。とりわけ防災という話になると、防災専門の方は「きちんと防災のことを広報しているじゃないか」と言われますが、読んでいる方は全くちんぷんかんぷんという場合があるということです。

今日申し上げたいろいろなお話で何かピンとくるものが一つでもあれば、それを使っていただければと思います。なお、ボランティアネットワークのほうはホームページをごらんいただいて、何かありましたら取り上げていただければと思います。ご清聴ありがとうございました。